

「2023 わかばこどものまちCBT」実施報告

— コロナ禍を経て、子どもが求める学びの場の必要性 —

田村 光子

The Report of “2023 WAKABA-CBT” project

TAMURA Mitsuko

本稿は、植草学園小倉キャンパスにおいて2023年7月に実施された、2023わかばこどものまちCBTの取り組みとその経過について報告する。コロナ禍を経て、数年は実施できなかったことも影響し参加者は減少した。一方で、これまで参加してきた子どもたちが大きく成長した経過を把握することができた。コロナ禍を経て、あらためて子どもが求める学びの場が必要であることを実感する取り組みとなった。

キーワード：こどものまち、わかばこどものまちCBT、コロナ禍

1 はじめに

2023年7月17日（月・祝）、植草学園小倉キャンパスを利用して「2023わかばこどものまちCBT」（以降、わかばCBTとする）が実施された。本学では前回、2016年に開催されて以来の実施となる。

2016年以降は数年間、同じ若葉区内にある大学にて実施してきたが、コロナ禍の実施は難しく、オンラインで実施するなど、育まれてきた、子どもたちのつながりや、活動への思いが引き継がれていた。2022年度も実施を検討したが、コロナ禍に实际的な展開がなかったこともあり、コアスタッフおよびボランティアの参加希望が思うように伸び悩み、実施を断念した。2023年は実施したいという強い思いから、実行委員の大人スタッフの協力により、3月にキックオフイベントを実施するなど、事前の仕掛けづくりも行き、今回の実施に至った。

今回のわかばCBTでは、会場に参加来場した子どもたちの数は156名、活動の準備・企画・実施まで中心的にごかしていくコアスタッフとして参加した子どもが45名となり、計201名の子どもたちの参加となった。また、未就学のお子さんやその保護者の参加が50名ほどあり、250名程度の皆様に来場いただくイベントとなった。

さらに学生を含めた大人スタッフが46名、見学者5名、実行委員8名の協力を得て実施となった。千葉市、若葉区、植草学園、また民生委員・児童委員ならびに参加した大人スタッフの皆様、ボランティアの学生、その他多くの方々のご理解、ご協力により、コロナ禍を経て、難しい局面の中で、新たに実施を実現できたことに、本報告をもって、あらためて感謝したい。

2 千葉市の「こどものまち」について

千葉市の「こどものまち」の取り組みは、参加する子どもたちには「CBT」という愛称で親しまれている。「CHIBA-TOWN（チバタウン）」のアルファベットから、子どもたちが名付けた愛称である。「こどものまちCBT」は、2009年から開始となり計15回開催されている。わかばCBTは、そこから分派した地域版のこどものまちであり、千葉市若葉区の子育てNPOや若葉区子育てフォーラムが中心となって実行委員会が設立され、2015年より取り組みが始まった。

こどものまちの仕組みについては、全国で展開されているこどものまちによって、開始の過程や大切にされる方針、意図にはさまざまな違いはあるものの、子ども主体の参加・疑似都市の体験・独自の通貨などの要素を共通としている。

「こどものまちCBT」では、“市役所”に登録して“市民証”を受け取り、“お仕事センター”で仕事を探し、さらに働く“市民証”にその時間数が記入され、“銀行”にいくと通貨“カフェ”を受け取る仕組みとなっている。さらに“市長”が選出されるというながれについても、ドイツ・ミュンヘンにおける「ミニ・ミュンヘン」からその要素を取り入れている。千葉市HPにおいても、子どもたちが「まち」を運営することにより、「疑似社会体験をする中で、協働作業や協議による課題解決を通して、社会へ参加することを学ぶプログラム」としている。

3 開催までの経過について

2023年度のわかばCBTの展開は、コロナ禍を経て、キックオフイベントから開始された。

大学近くにあるコミュニティセンターの一室を利用して、実行委員長の田中照美氏のファシリテートにより、体を動かしながら子どもたちがつながりや絆を深める活動が展開された。「世界ゆるスポーツ協会」の協力を得て、いくつかの競技が説明され、体を動かす活動が得意な子でなくても、また幼児から大人まで楽しめる企画を提案いただき、チームになって競い合う、ミニスポーツイベントとなった。



キックオフイベントを楽しむ様子

キックオフイベントを経て、6月よりコアスタッフ会議が始動。全7回のコアスタッフ会議で準備を進めていった。

本学の1年生も大人スタッフとして子どもたちの

助っ人として参加した。「はじめは1～2回の参加でいいかなと思っていた」という学生も、子どもたちとの関係が深まる中で、自分の役割や責任も徐々に感じるようになり、ボランティアという枠組みを超えて、大人スタッフとして子どもたちのかかわりを深めていく様子が見られた。「ボランティアは主体的な取り組み」であることが基本ではあるものの、社会経験が未熟な学生にとっては、受け身になりがちで、授業の単位のために体験・参加するだけになることが多い。「こどものまち」は、子どもが主体の活動であり、はじめは「お飾りの参加」や「イベントとしての体験」であったものから、実際に活動を主体的に動かしていく「参画」に進んでいく特徴がある。こうした子どもの姿から影響を受けて、大人スタッフも「子ども主体とは何か」「参画とは何か」を悩みながら、子どもたちと関わりあうことになる。さらに、わかばCBTは子どもたちとの距離が近く、大人スタッフの責任も大きくなる。学生にとっては、ボランティアに対する考え方や意識を変えさせる一つの取り組みになったようである。



コアスタッフ会議の様子

コアスタッフ会議での準備を経て、いよいよ7月17日（月・祝）本番を迎えることになった。久しぶりの開催ということもあり、実行委員の大人たちには不安や心配があったものの、子どもたちはそんな不安も吹き飛ばすかのように、自分たちが作りあげてきた、準備してきたわかばCBTを思いっきり楽しむ様子がみられていた。

4 2023わかばCBTの概要

コロナ禍の影響から実際的な開催ができなかった3年間に、コアスタッフも小学生が中学生に、中学

生が高校生となり、中心的に参加し、まちを動かしていく小学生たちの多くは、1、2年生の時に初体験した子ども、または初めて参加する子どもたちが中心となった。コロナ禍を経て、どれだけの子どもたちが関心をもってくれるのか、不安があったものの、当日朝の入り口には子どもたちの列ができていた。

わかばCBTでは、入場時に参加費300円と引き換えに、市民証と“300P”（P（ピー）はわかばこどものまちCBTの通貨単位）が渡される。入場をすると「こどものまちアカデミー」があり、はじめて参加する子どもたちに、まちのしくみを説明してくれる。参加の仕方が理解できたら、「お仕事センター」で自分にあった仕事を見つけて取り組むことになる。それぞれの仕事先で働いた時間数と印を市民証にもらうと、「ハッピー銀行」でさらに“P”を得ることができる。何かこまったら「市役所」で相談することもできる。

入場とともに“300P”があるため、どんな仕事をしたらよいか困ったら、まずは“P”を使ってまちを楽しんでから、自分にあった仕事を見つけて働くこともできる。



わかばCBTの
ハッピー銀行
市役所と
“P”と市民証



お仕事センターの様子

まちには、“フードコート”や“おばけやしき”を楽しんだり、“ハッピーこども園”では、幼い子どもたちと一緒に遊んだり、手作り遊びなども楽し

むことができる。子どもたちがプロデュースした“まち”は、幼い子どもや初めて参加する子どもにとって参加しやすいしくみとなっている。

一方で、今回のわかばCBTでは、コロナ禍の影響を受けた久しぶりの開催であるため、コアスタッフにより事前に準備できた仕事数は前回よりも少なくなかった。こうした影響もあるのか、開始後まもなく「お仕事センター」は「仕事不足」となった。仕事がない状況を経て、子どもたちは仕方なくお客さんになって遊び出す。フードコートで食事を楽しんだり、「宝くじ」を買ってみたり、「わかばCBT交通」でタクシーやバスにのってみたりする。すると、だんだんと仕事が増えていき、はじめてまちが動きだす。



フードコートの様子



わかばCBT交通



千葉市長も
乗車しました

まじめな日本人の特性なのか、「働かざる者食うべからず」とも言うべきか。わかばCBTのみならず、「こどものまち」はその特徴として「仕事不足」はつきものでもある。

筆者が以前、「こどものまち」のモデルともなっているドイツ・ミュンヘン市で開催されている「ミ

ニ・ミュンヘン」を参与観察した際も、多彩な仕事
が準備されながらも、やはり「仕事不足」が現実で
あった。「ミニ・ミュンヘン」では、仕事創出のため
のコンサルタントがいて、新たな仕事が創出される
ように工夫がされていた。今後のわかばCBTにも
新たな仕事が創出される仕組みづくりは必要であ
ろう。

5 2023わかばCBTの特徴

2023わかばCBTでは、市長選はあえて実施しない
ことになった。コロナ禍を経て、コアスタッフの活動
の成熟度などを考慮した結果、子どもたちで考え、
判断されたとのことであった。それでもこれまで市長
を務めてきた高校生やその仲間が集結し、さらに社
会人や大学生となり大人スタッフとしてわかばCBT
の再興のために働いている姿が印象的であった。

また、コアスタッフからの提案で税金のシステム
が導入されたのも印象的であった。わかばCBTの
まちの運営のために、高校生のコアスタッフが考案
してくれた税金のシステムについて説明をうけると、
小学生の子どもたちも「導入する」に手をあげる
者がほとんどであった。システムの計算式は難しく、
大人スタッフが考える以上の完成度であったり、
小学校低学年の子どもたちにもわかるように説明
を重ねる姿、さらにそれに応えようとする子ども
たちの姿がそこにあった。こうした子ども主体の姿
こそが「こどものまち」の醍醐味である。

わかばCBTのこれまでの取り組みでは、「Reach
to くまもと」を合言葉に熊本の復興支援に取り組ん
できた背景がある。こうした経験を積んだ子ども
たちから、「ウクライナの子どもたちを支援できない
か」という問いが投げかけられた。子どもたちの声
を千葉市にも届けながら、実際にウクライナから避
難されているご家族に参加を呼びかけることが実現
した。ウクライナ国内の情勢や家族の状況なども影
響して、実際に参加には至らなかったものの、こど
ものまちを通して、現実の社会とのつながりの中で、
子どもたち自身が、できることを考え、声をあげ、
それを大人たちが実現しようとする姿勢は、わかば
CBTの一つの特徴である。3年ぶりの開催の中
でも、その思いが息づいていることに感心させられた。

また、2023わかばCBTでは、外部の企業や団体

の協力があつたことも特徴の一つである。前掲でと
りあげたキックオフイベントでは「世界ゆるスポー
ツ協会」の協力を得た。

さらに、わかばCBTのITブースとして「デジタ
ルおえかき」と子どもが名付けたお仕事が、株式会
社スマートエデュケーションの協力による「きつ
つ」アプリを使用した遊びコーナーとなった。

今年度の取り組みでは、実行委員である大人側か
ら、こうした団体や企業が提供できるアクティビ
ティの提案を受けて、子どもたちが体験的に活用し
ながら、わかばCBTの展開にとりいれたかたちと
なった。次回以降は、経験を積み重ねることによ
り、子どもたちが主体的に団体や企業への協力を呼
びかけ、実社会とつながりながら創造的にまちをつ



「きつつ」アプリを活用した「デジタルおえかき」
協力：(株) スマートエデュケーション

くりだしていく取り組みに期待したい。

6 おわりに

本稿では、2023わかばこどものまちCBTの取り組みとその経過について報告した。今回の活動展開では、コロナ禍を経て新たな形で再興されるわかばCBTの様子が見られた。その中でも、これまでの取り組みで経験を重ね、育ってきた高校生スタッフの活躍や、そこであらたに活動を展開していこうとする小学生コアスタッフの姿、大学生・社会人になって再興を支える大人スタッフなど、各世代が地域の中で成長していける社会的学びの場の必要性をあらためて感じた。



千葉市長と一緒に写真撮影

「こどもまんなか社会」の必要性が叫ばれるようになり、いま教育・保育分野において、子どもの権利や子ども主体の考え方について問われる時代となった。

「子どもの声を聴く」「子どもの意見を反映させる」という言葉は、どのように大人や社会の側が捉

え、それを形にするのかで全く異なるものとなる。「こどものまち」における「こども参画」には、そのヒントが大いに詰まっているとも言えるであろう。今後も活動展開に関わりながら、子どもの権利を実現する活動の取り組みについて、検討を重ねていきたいと考えている。

謝辞

改めて「2023わかばこどものまちCBT」の取り組みにご参加、ご協力いただきました皆様に感謝いたします。また、千葉市、若葉区、植草学園ならびに「世界ゆるスポーツ協会」「(株)スマートエデュケーション」のご理解、ご協力に感謝いたします。

参考・引用文献

- 千葉市子ども未来局子ども未来部子ども企画課HP
<https://www.city.chiba.jp/kodomomirai/kodomomirai/kikaku/kodomonomachicbt.html>
 (2024.1.12参照)
- わかばこどものまちCBT・FBサイト
<https://www.facebook.com/wakaba.kodomonomachi>
 (2024.1.12参照)
- 「大学—地域連携による『わかばこどものまちCBT』の取り組み—多様な子どもの学びの場の必要性についての検討—」
 (植草学園短期大学研究紀要第18号, 2017)

協力団体

- 世界ゆるスポーツ協会
<https://yurusports.com/event>
 (2024.1.12閲覧)
- 株式会社 スマートエデュケーション
<http://www.smarteducation.jp/>
 (2024.1.12閲覧)